な人の眞似は修業中は斷じて爲てはいけぬといふて話を終られた。

いよ〳〵餘興だ、始めに動物園があつた、次には髮の毛の長い人が淺黄の上下つけて手品をした、勿論失敗と成功と相半してゐる、**トヽデタリカヽデタリー**がある、一同大笑ひだ、福引が始まる、隨分奇拔なのがあつたか今は忘れてしまつた。

日がくれて來たので下の室へ移つた、瓦斯の光の下に**ちらしずし**の晩餐をやつた、何處からとなく大きな密柑が降つて來た、それを拾ふので一時は大騷ぎをやつた。

是から先生方の方には**カルタ**がある、吾々の方には國旗合せ家族合せがある、**アンマさん〳〵**が始まる、**オゼヾ**は**ドコダ**が始まる、**トンダ〳〵**が始まる、遠方だからといふて歸る人もある、九時頃には二十人ばかりになつた、僕もこの時御免を蒙つたが、そのあとで又二時間ばかり面白い遊びがあつたそうだ、吾等の新年會は、如斯實に無邪氣に樂しく終つた、萬歲！

＊　＊　＊　＊　＊

カトウヰク

和歌山　晩雨生

二月二日（舊正月元日）、日曜、曇

（前略）、一里ほど歩いて、和歌の浦と、小山を背合せにした大浦といふ入江へ來た、其所には、熊野行の漁船が何十艘となく、とまッて居て、それには皆「大漁」と白く拔いた**ヴアミリオン**或は**オルトラマリン**の旗を建てゝある。それがユラ〳〵と搖く波にうつッて居る。而も其赤いのが。

自分は暫く眺めて居たが、描けそうもない又描くべき景色ではない、船は何十艘もある、旗は何十流もある、而もうつッて、居る或は反射して居る形は素敵に立派だ、併し惜い哉變化がない。描いては面白くない見るべき景色だ。自分は今までも、こんな景色に會うた事がある。見るべくして、描くべからざる景色だ。嘗て海拔四千余尺の金剛山頂で　二千五百年前、神武天皇が賊と戰はれた大和平原を見下ろして、かの山陽の詩の「合圍百萬兵、陣雲繞麓黑、臣豈不自惜、受託由面勅、灑泣誓吾旅、爲君鏖鬼蜮、」といふ句を心に浮べて、建武の昔に思を走らした時、言ひ知れぬ懷古の情に打たれつゝ其崇高な景色に見入ッた。それは正に見るべくして、描くべからざるの景色であッた。

そこで自分は、ずッと其船の群からはなれて岸に繫がれてあッた、一艘の船を寫生した。寫生したといへば、唯四字でいひ盡してしまうが、それは午前九時から午後一時まで、四時間、即ち一字一時間に相當する其間霙まぢりの北風を眞正面に吹きつけられては、何回凍りきッた、無感覺になッた指尖に、息を吹きかけたか知れない、それでも手は無意識？に動いて來たと見える。

正月の事だから、見物人も隨分あッた。屠蘇機嫌の漁夫連が、十人も寄ッて來たのだからたまらない、而も自分の周圍で一場の畫論が持ち上ッたには驚いた。併し彼等は流石專門家である。其批評は實に適切だ。自分はヒヤクとする樣な事もあッた。應擧じゃないが、彼等によッて、多くの船に就ての智識を得た尙今一つ得たのは、否援けられたのは、一人の漁夫曰く「お前さん何

時まで寫しなはる」余曰く「さア二時頃までかかるでせう、」「さうかえ、それでも午ヒルになると潮が引きますよ、」自分は啞然たらざるを得なかッた。

若し此言を聞かなかッたら、かの面白い帆柱や、網のうつッて居る影を、あたら月のために奪ひ去られるのだッた。

感謝を以ッて彼等を眺めた自分の眼は、彼等の凹凸多き剛然たる顏面筋肉の内に、隱然として潜んで居る朴訥な親切や、優しみを、認める事が出來た。「南風」ではないが、自分も何時かは、この恩ある親切な、漁夫を繪にして見やうと思ッた。

自分は此入江へ來た時から、畫を描き終るまで。かのヂヨーヂ、エツチ、バウトンの荷蘭寫生旅行中の一節、丁抹のカトウキクを想像して、何だか此所の樣な景色じやないか知ら、と思うた。（寫生日記の一節）

我水彩畫の歷史（上）

信濃上田　矢ヶ崎天民

いつてあつたか、四辻の或人家の横の板塀ここはいつも廣告貼場になつて居るので、糊のついたところだけはげずに紙が殘つて長方形の横のや縱のや、赤いのや青いのやいろいろ輪廓だけ死骸を止めて居る、其中に今貼られたばかりと思はれる大きな廣告には、筆太に宗教大演說會、辯士誰々、時間何々、會場何々教會とある。暇ではあつたし、二つには其辯士が有名なので出掛けていつたことがあつた。

金、名譽、戀、怒、等の相競ふて居る境に行く道は廣くして平坦であるが、信仰に入る道は狹くして嶮しい、それで信仰に入るには、懺悔だとか信念とかえらくむづかしいことを、いくつか經なければならんなどと聞いた樣に覺へてゐる、其演說を聞いて成程なアとは思つたがその爲精神上の動機となつてクリスチヤンになつたでなし、別に變りなく翌日もやはりパンを得るに床からぬけだした。

ところが偶然水彩畫を始めようと云ふのでいよいよ其門にはいつて見ると、これは宗教などと異つていよいよ信仰にはいつてからの苦行が大變なものだ、實に自分にとつては釋迦が雪山で難業苦行をしたよりも以上だつた、と云ふとそんなに苦しいのなら畫家にはなるまいなどとふるへる人があるとこまる。

變手古なものが出來ておかしくて堪らないのだ。

先づ彩料を買ふ前に二つの關門を通過したそれはなんだと言ふと、

第一に自分のゼニアスを疑つた、

はたして自分に繪がかけるかどうかと言ふことだ、いろいろ總合してみた、生徒時代のとき、あの繪を描いたら七十點であつたけれど次の繪は九十點であつた、校庭の立樹を寫生したときは乙であつたが、花瓶を寫生したときは甲であつた、などと思ひ出して見て、これは天才とまでは行かなくても普通の人位にはかけるだろうと云ふので第一關門は無事通過。

第二には水彩畫とはどうして描くものだかどんな繪具でやるのか、曾て教はつた事もなければ聞いたこともないので、此處で一寸躊躇した、けれども早通本屋へ行つて水彩畫について何か書いた本はないかと言ふ